

# 故中村俊直名誉教授を偲んで

田 中 琢 三

私が中村俊直先生の訃報に接したのは2024年3月の半ばである。先生が亡くなられてからすでに90日ほど経過していた。大学に向かうバスの中で、学生時代にお世話になった恩師から「中村先生が逝去されたという報せを奥様からいただいたが、奥様と連絡が取れない状態で、事情が分からないので教えてほしい」という内容のメールをスマホで読んだのである。私にとっては全く思いもよらないことであり、いつもお元気にされているイメージしかなかった中村先生の訃報が信じられず、バスを降りてからもしばらく呆然としていた。

数日後、連絡をいただいた恩師から以下の経緯を知ることになった。中村先生は2023年2月に病院で肺腺がんの疑いを指摘されたものの、そのまま放置していた。8月に体調不調になって精密検査を受けたところ、すでに肺から肝臓に転移していた。11月に体調がさらに悪化して入院され、最後はホスピスで終末ケアを受けられたとのことである。中村先生は2024年1月31日に永眠されたが、ご本人の意思によって、訃報は3月になってから親しくされていたご友人数名のみに伝えられたという。最初の段階で精密検査をお受けにならなかったことが何よりも悔やまれるが、豪放磊落な一面もあった中村先生のご性格がこのような悲劇を招いてしまったのかもしれないと思う。また、ご自身の死をあまり公表しないようにされたのも、私にはどこか中村先生らしいふるまいのように感じられた。

中村先生は、東京大学文学部仏文科のご出身で、フランス政府給費留学生としてモンペリエ第3大学に留学されたのち、1986年に東京大学の助手に就任された。その後、1989年4月にお茶の水女子大学文教育学部外国文学科に講師として着任され、1991年に助教授、1999年に教授に昇任され、2017年3月に定年退職された。本学には28年間の長きに渡ってお勤めになったこと

になる。ご専門は近現代のフランス文学で、特に19世紀末から20世紀前半にかけて活躍した詩人・批評家のポール・ヴァレリーを主たる対象として研究された。中村先生のご研究は、おもにヴァレリーの批評を丹念に読み解くことでその言語観や芸術観を明らかにしようとするもので、その成果は日本およびフランスの学術雑誌に極めて明晰な論文として発表されている。さらに日本ヴァレリー研究会の委員長を務められるなど、我が国のヴァレリー研究の発展に大きく貢献された。大学の学務においても、フランス語およびフランス語圏の文学・文化の教育に熱心に取り組みられるとともに、仏語圏言語文化コース（以下、仏文）の運営と発展に尽力された。さらに、2010年度から2013年度まで附属幼稚園長、2015年度と2016年度は大学院比較社会文化学専攻長を務められ、大学運営の面でも大きく寄与されている。また、本学の比較日本学教育研究センター（現コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門）にも所属され、日仏比較文化をテーマにした国際シンポジウムの企画・運営に尽力されるなど、本学における日仏の学術交流において重要な役割を果たされた。

私は本学の専任教員として着任した2010年4月から、中村先生が退職される2017年3月まで7年間、先生とご一緒に仕事をさせていただいた。今振り返るとこの期間は私が教員として多くを学んだ時期であり、毎日のようにお会いしていた中村先生との思い出は語り尽くせないほどである。私が本学で勤務し始めたときに印象的だったのは、中村先生が学生からファーストネームで「俊直先生」と呼ばれていたことである。私の前任者である中村弓子先生と区別するためにそうしていたのだと思うが、このことは先生と学生たちの距離の近さを感じさせた。実際、温和で優しくユーモアに溢れた中村先生は、学生にとって気軽に話しやすい存在であったようで、当時の仏文のアットホームな雰囲気は中村先生のお人柄が反映されたものであった。ある仏文の卒業生によると、授業中に一番前の席で居眠りをしていても中村先生は何も言わずニコニコして話をされていたという。その卒業生から見た先生は、知的で紳士的なフランス文学者のイメージそのもので、授業ではフランスについて語りたいたいという情熱が伝わってきたということである。おそらくほかの学生も同じような印象を抱いていたことであろう。

中村先生は学生から「園長先生」と呼ばれてもいたが、これは先述のように附属幼稚園の園長をされていたからである。2010年4月、私が本学に着任すると同時に先生は幼稚園長の職に就かれたのであるが、ちょうどこの年

に、秋篠宮文仁親王の長男である悠仁親王が附属幼稚園に入園され、中村先生は親王が卒園されるまで4年間園長を務められることになった。本学が皇位継承資格を持つ皇族を受け入れることは初めてのことで、当時メディアでもかなり話題になっていた。園長の業務について先生が私に話されることは少なかったが、マスコミ対応や警備の問題など、通常の業務をはるかに超えたデリケートかつ責任の重い仕事をされていたようである。

そして、そのような大変な役職に就かれていたにもかかわらず、当時の私が何の経験もない新米の教員だったため、中村先生は、授業や論文指導のほかに、仏文の主任として、新入生向けのガイダンスから時間割の作成までコース運営に必要とされる数多くの業務をほとんど一人でこなされ、さらにコース選出の学内委員の多くを担当されていた。そのため中村先生は、学期中はもちろん、授業がない期間も毎日出勤されて、何かしらの会議に出席したり、幼稚園関係の行事に参加されていた。したがって私にとって中村先生は常に忙しくされていたという印象しかなく、実際、息をつく暇もないほど学務に追われているご様子であった。ある時、中村先生がフランス人の教員になぜそれほど仕事をするのかと尋ねられて、「Parce que je suis typiquement japonais. (私は典型的な日本人だから)」とお答えになっていたのをよく憶えている。

しかし、中村先生がこれほど熱心に仕事をされていたのは、何よりも仏文を存続させるためであった。私にはそれが先生の唯一の原動力であったようにも思われる。当時の仏文は大学改革のあおりを受けてまさに存亡の危機にあり、いつ消滅してもおかしくない状況におかれていた。そのような危機に直面していたからこそ、私と中村先生の関係性も強くなったのであるが、先生には仏文を絶対に守るという強い意志が感じられた。コース会議では毎回のように仏文が独立したコースとして生き残るための方策について話し合い、2013年7月に仏文が企画して国際日本学シンポジウム「フランスへの憧れ－生活・芸術・思想の日仏比較－」を開催したのも、2014年5月に本学で日本フランス語フランス文学会の全国大会を開催したのも、学内における仏文の存在感をアピールするためであった。その結果、一時は風前の灯であった仏文は消えることなく今に至るまで存続し、安定したコース運営ができる状況にある。このような現在の仏文があるのは、ひとえに中村先生が困難な時期に身を粉にして奮闘されたからであり、その姿を間近で見ていた私は仏文の教員として先生に感謝してもきれない思いがある。

最後に、個人的な思い出を書かせていただくと、10年ほど前に仏文の卒業

生の結婚式に私と先生が招待されたことがあった。お台場の大きなホテルで行われた豪華なもので、礼服の中村先生が朗々とした声で祝辞を読まれる姿が印象的であったが、よく覚えているのは、そのホテルのロビーでネイティヴの教員の公募について打ち合わせをしたことである。このような場所でもいつものように仕事の話をするのがいかにも中村先生らしく、素晴らしい結婚式と合わせて私には忘れがたい一日となった。

私は今後も、中村先生のご遺志を継いで、仏文のスタッフと協力してコースの一層の発展のために努力をするつもりであり、何よりもそれが先生へのご供養になると思われる。中村先生に感謝の念を捧げるとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げたい。